11 Contemporary Sociology

学生にとっての「ジェンダー」と「恋愛」

山形大学助教授
河野 銀子
1989年武蔵大学卒業。95年上智大学大学院博士課程単位取得退学。専門は教育社会学、ジェンダー研究。著書に『理科超れしているのは誰か―全国中学生調査のジェンダー分析―』(共著、日本評論社 2004年)ほか。

―今つきあってる彼が、「おまえを守る」って言うんです。私は、弱くないし、いままでも男に頼って生きてきた憶えはないので、なんか腹が立ちます。

―彼女へのプレゼントに、花束を頼むとき、「ラッピングはピンクで」と言うのは、ジェンダーの問題だと思う。でも、自分はそうしてしまったんですが(笑)…。

―「男=ケダモノ」っていう風潮が、女性にだけではなく、男性の中にもある気がします。つきあってる彼女といつも「性交渉を」したい」わけないじゃないですか。でも、男同士の会話では、したい方が普通、という雰囲気。

―好きだった相手に、同性しか愛せないと告白され、どうしたらいいのかわからなくなりました。そういう人もいると頭ではわかっていてもショックで…。

授業で「ジェンダー」を取り上げると、学生からはさまざまな反応が返ってくる。最近は、中学や高校でジェンダーに関する学習をしてきた学生もいるし、そうでなくても、言葉くらいは知っている。しかし、正しく理解しているとは限らないし、ジェンダーの概念自体が変わってきたことは、ほとんど知らない。

そこで、授業では概念が創出された背景や諸研究を紹介し、「『こと』を書いてもらう。すると、半分以上の学生が、恋愛について書く。それも、自分がつきあっている相手との間の出来事が多い。

彼らが20歳前後であること、性別による教育制度上の不平等を経験していないこと、社会人が直面するような性差別の体験が少ないことなどを踏まえれば、「恋愛」が「ジェンダー」に直面するきっかけであることは、当然だろう。

ところが、大学は「ジェンダー」を教えてくれても、「恋愛の仕方」は教えてくれない。恋愛に興じる彼らの日常は、先のようなコメントとして「ジェンダー」に関する授業の感想に口語体で現れるのだ。

大学は大衆化し、学生に伝える内容も変わってきた。じっくり考える時間や一見無駄そうな知識などを与えるより、本の読み方、レポートの書き方、ノートの取り方のようなスキルを教える方が好まれる。教師が、学生のレポートの「てにをは」や漢字の間違いに朱入れして、返却することも日常だ。過剰サービスのようにも思うのだが、間違いを放置しておくのは、無責任な気がするからだ。

しかし、大学には教えられないこともあるし、教えない方がいいこともある。「恋愛」はそういう残余のひとつだろう。「ジェンダー」で揺さぶっておいて、「恋愛」は個々に悩んでもらう。「教えてもらいたがり」の学生たちに、教えてはもらえないが大事なこともある、ということを伝えたい。でも、ついついお節介したくなって、

―彼とそういうことも話せるといいね。

―いっぱい悩んでね。悩めるっていいよね。

などとコメントして返却してしまう。「教えてもらいたがり」の学生を作っているのは教師側かもしれない。

武内教授から一言

武内 清(上智大学文学部教授)

大学の講義内容は抽象的で無味乾燥なものが多く、学生の身近なことに結びつき、恋愛問題にまで関与できるテーマは少ない。ジェンダー問題はその数少ないテーマの一つであろう。

性差は生得的な要因によって決まる当たり前の差と思っていた学生の思考に揺さぶりをかけ、ジェンダーを決定する社会的要因やそのプロセスを指摘することは、大学の授業でできる。社会学者の井上俊らが言うように、運命や生まれながらのものと思われていたものが、人間が作った制度や文化の所産であると知ったとき、人間の思考は自由になる。人間が作ったものであるのなら、人間の手で変えることができると。

大学の授業は学生の思考を自由にし、多様な選択の可能性を示す。しかし、その先の選択や実践は学生に任される。

大学の教師達が考える理想の大学は、知識や技術を学生に注入する「自動車学校型」でも、イデオロギーを説き生き方を示す「予言共同体」でもない。教師と学生が知の探求を共に目指す「知的コミューン型」であろう(湖木守一著『キャンパスの生態誌』中公新書より)。

「知的コミューン」とは、知識を背景にしながら、教師と学生が対等で、身近に抱える問題を出し合い、自分の体験や感覚を大事にしながらその解決の糸口を探ったり、学問上の新発見を目指すことである。それは、教師側の深く広い知識と学生に対する感受性、学生側の探究心と自立性そして教師との信頼関係があってこそ成立する。

上野千鶴子さん
ビジュアルギャルの大研究と
完成!

武内清編『大学とキャンパスライフ』
上智大学出版
2005

社会学の現在 11
シリーズ 社会学の現在
Contemporary Sociology
世界思想社

抵抗の快楽

ポピュラーカルチャーの記号論

ジョン・フィスク
山本雄二 訳

READING THE POPULAR

by John Fiske

Copyright © 1989 Unwin Hyman

マドンナ

マドンナ――それは一九八〇年代後半を通じて、世間の注目を集めつづけてきたポピュラーカルチャー現象であり、とりわけ厳密な研究対象である。マドンナが成功したのはその音楽作品（はたしてそれは音楽といえるのであろうか）にもよるけれど、それに劣らず、ビデオ作品やこの人のキャラクターによるところが大きい。さらに重要なのは、新聞・雑誌などの報道や批評に加えて、マドンナのファンや宣伝マンでもが、音楽そのものよりもマドンナの容姿や、彼女が何者であり、何を象徴しているのかという問題に関心を向けていることである。

マドンナ・ファンの一四歳の少女ルーシーはマドンナのポスターについてこう言っている。

> あの人は嫌嫌みたいで、そそられるわ……だけど、それはマドンナがするからいいのよ。えーと、わたしが言いたいのはつまり、もしほかの人が同じことをしてもただの悪趣味か嫌悪そのものよ、わかるでしょ。でも、マドンナはいいの、許せるの……ほかの人だったらまったく論外よ、変に関りえるかもしれないけど、あの人だからいいの。言いたいことわかるでしょ。（一九八五年一一月）

ルーシーはマドンナのセクシャリティを表現するのに男性的な言いぐさを使っている。ルーシーはマドンナのポスターに注目しようとしているのだが、彼女の言葉は「嫌嫌みたい」とか「そそられる」とかである。しかし、ルーシーはそのことばが男性中心的言説に抵抗し、同時に自分自身の内部にすりこまれた男性中心的視点をもまた抵抗しようとしている。

マドンナの制度であり、マドンナのセクシャリティはこれを脅かすものだと考えることができるかもしれない。おそらく結婚が男性による女性支配の制度であり、マドンナのセクシャリティはこれを脅かすものだと考えることができるかもしれない。今日、マドンナほどもてもてもらえる女性は嫌嫌がられる女性にもてもらえる女性と同じように、男性的な支配の中で御しやすいものではない。彼女は男性支配からの解放というもうひとつのテクノロジーを獲得したのである。あるいは、マドンナは男性社会の慣習的な考え方をうまくすり抜けているのである。雑誌「タイム」（*Time* May 27, 1985）によれば、多くの少年たちがマドンナのセクシャリティを敬遠しているものとみなしており、「ひょっとしたら自分たちはからかわれているのかもしれない」（p. 47）というのもうなずけることに原因があるのかもしれない。

> マドンナはセクシーだけど、男は必要じゃないのよ。……あの人は自分自身ですべて完璧としているって感じ。（*Time* May 27, 1985: 47）

> マドンナを見てるといろいろ考えさせられるわ。本当のウーマンリブよ。男たちがどう思うかなんて心配する必要ないってことね。（*Time* May 27, 1985: 47）

これらの意見から感じとれるのはマドンナが自己決定権をもっているという感覚である。この感覚はまさにマドンナ・ファンに性的なものなのである。

パロディの力

マドンナはこの不満を象徴的にパロディとして利用する。

> 彼女は思いだしてこう言う。「子どもの頃、祖母からよく言われたわ。お願いだから男についていっちゃだめ、イエスを愛しなさい、ってずいぶんうるさくね。わたしにとって、女性は一種類しかなかったの。聖女か娼婦。そうしかね。」（*National Times* August 23/29, 1985: 9）

マドンナはいつも男性社会における不満を二つの女性像を表現する。「タイム・アウト・ウーマン」のビデオでは、白いドレスを身にまとった優雅なマドンナとセクシーな軍服に身をつつんだ挑発的なマドンナが交互に登場する。マドンナ（聖母女）も名乗る、性的刺激にあふれた女性。修道女が身につけるものは、黄出しの胸や官能的にくねるその上だ。「子どもの頃、修道女はとても楽しかったわ……あの人たちは規律に従順なんてノーっていう、ただはんとうに穏やかな顔をしてただけ。修道女はセクシーよね」（マドンナ、*National Times* August 23/29, 1985: 9 からの引用）。

マドンナはこのテクストのなかに対立的な女性像をこしらえ、マドンナは、男性のパナモニーのなかで、女性はそれに対立的女性像がどんな役割を果たしているのかに人びとの注意を向けさせる。すなわち、女性は男性によって、聖母と娼婦に分けられる。あるがままの男性的主体の立場からしか自分をみることができないという点でである。それだけではない。マドンナはまた